

【継承】母から娘へ

千厩の女性たちが手作りで開催する「せんまやひなまつり」。今日では市内外から5千人もの人が訪れる春の風物詩になりました。ひなまつりの魅力とは何でしょうか。その本質に迫ります。



- 1.酒のくら交流施設を訪れた親子と触れ合う昆野洋子委員長㊦
- 2.ずらり並んだ段飾りは圧巻
- 3.テープカットで開幕を祝った
- 4.開会セレモニーで村上達男千厩支所次長が詠んだ「蘇の老舗酒蔵ひなまつり」
- 5.地元ニイハオ千厩観光クラブがツアーを企画し、ガイドを務めた
- 6.会場には友禅着物展のコーナーも設けられた

仙台市出身で本市在住の会社員



Saijo Toshiki

西城俊昭さん 60 宮前町

同僚に誘われて訪れました。酒のくら交流施設は、昔ながらの雰囲気があっていいですね。段飾りとつるし飾りは豪華で迫力があります。すてきなまつりに感動しました。

バスツアーに参加した平泉町の主婦



Konno Eriko

今野恵子さん 56 平泉町

初めてツアーに参加しました。風情があってすてきなまつりですね。色とりどりのつるし飾りが美しく、ひなの種類が豊富なことに驚きました。自分も作ってみたいです。

千厩の春の風物詩

「第5回せんまやひなまつり」（同実行委員会主催）は2月11日に開幕、3月4日までの23日間行われています。

メイン会場の千厩酒のくら交流施設や商店街の各店舗には、段飾りやつるし飾りが展示され、訪れる人に季節感と安らぎを与えています。期間中は各種イベントも目白押しで、千厩の商店街は連日にぎわいをみせています。

酒のくら交流施設で2月11日、行われたオープニングセレモニーには実行委員会、市の関係者や来賓など約30人が出席。あいさつに立った昆野洋子実行委員長は「立春を過ぎても、まだまだ寒い日が続いています。ひなまつりで、気持ちだけは、ほっこりと春を感じてほしい」と述べました。来賓を代表して村上達男千厩支所次長が「蘇の老舗酒蔵ひなまつり」と祝辞を寄せ、5回目の春の風物詩が幕を開けました。

随所に女性らしさ

大正ロマン漂う蔵には、江戸時代のひな人形や地域の女性たちが心を込めて作ったつるしびなが飾られ、古里の歴史や文化を感じることが出来ます。一方、商店街

「蔵サポーターの会」「関商工会議所女性会千厩支部」「せんまや逸品の会」など女性たちが中心となって作り上げたせんまやひなまつりには、繊細で優雅な飾り付けや訪れた人を温かく迎えるおもてなしの心など、随所に女性ならではの感性や心遣いが感じられます。

「家庭で」から「地域で」

ひなまつりは、女子の健やかな成長を祈る年中行事です。ひな人形を飾ってお祝いすることで、優しい心や強い絆が育まれてきました。同時に、しなやかな感性や地域に伝わる風習が、母から娘へ、娘から孫へと受け継がれてきました。

気仙沼市出身で千厩字町の昆野芳子さん(91)は「気仙沼では友達や近所の人たちを呼んでみんなで祝いする風習がありました。千厩では各家庭ごとにお祝いする方が多いですね」と違いを語ります。

大正、昭和、平成と3つの時代のひなまつりを経験してきた

昆野芳子さん こんのよしこ 91 千厩町千厩

実家は気仙沼市で雑貨屋を営んでいました。一昨年、里帰りした時、赤い布が敷かれ、ひなが飾られていました。5段飾りは当時と変わらず立派でした。小さい頃のひなまつりは、近所の友達を呼んでみんなで祝いました。母が作ったお寿司や甘酒を囲んだことが懐かしいですね。その段飾りは、あの震災で流されました。残念でなりません。私は昭和14年に19歳で千厩に嫁ぎました。当時は、戦中戦後だったので、それぞれの家庭でお祝っていました。せんまやひなまつりはいいですね。古い段飾りを見るたびに楽しかった幼少期を思い出します。これからも長く続けてほしいです。



3

は過去最高の45店舗が参加。それぞれ趣向を凝らした展示で、街に彩りを添えています。

親子で酒のくら交流施設を訪れた小畑美智さん(32)、凛ちゃん(5)、璃子ちゃん(2) 千厩字下木六〇と西城美枝子さん(30)、美希ちゃん(3)、奈海ちゃん(3)、幸哉君(2) 小梨字時ノ沢は、ずらりと並んだおひなさまにびつくり。一つ一つ表情が違うひなをじっくり眺めます。委員長の洋子さんから段飾りやつるし飾りの説明を受けた凛ちゃん「つるし飾りのあやめが好き」とにっこり。美希ちゃん「こま犬がかわいい」と瞳を輝



4

ひなまつり。「みんなで祝うことはとてもよいですね。商店街にもかつての活気が戻ってきました。これからも続けてほしいです」とうれしそうです。

見る人に限りない安らぎを与えるせんまやひなまつり。「みんなが和んで楽しめる祭りになりたい」と、スタッフは今日もおもてなしの心で多くの人を迎えています。